

生きるための短歌 加古陽

角川書店の『短歌年鑑2019年版』に、例によって「今年の秀歌集」のアンケート特集が出ている。「今年」とあるが二〇一七年十月から一八年九月に出た歌集から歌人たちが選んだものだ。一位は二十二票を集めた岩田正の遺歌集『柿生坂』(角川書店)で、二位は二十票の小島ゆかり『六六魚』(本阿弥書店)。

誌面には五票までの二十八歌集が並ぶが、一見して大きな欠落があることが分かる。おそらくこの期間に最も売れ、テレビや新聞で何度も特集が組まれるほど反響を呼んだ萩原慎一郎『滑走路』(角川書店)が入っていないのだ。年鑑の「秀歌集感想より一部抜粋」を見ても阪森郁代が三冊のうち一冊に挙げていくくらいだ。

なんとなく理由が分かる。萩原の作品には、ある程度、短歌をやってきた者の眼からすると、ストリートすぎたり、表現が甘かったりする作品が散見されるからだ。現代短歌社賞の選考座談会(『現代短歌』二〇一八年十二月号)で、候補作の一つに対して瀬戸夏子が「歌の作りは微妙だけど内容に何かしら訴えるものがある」というときに、どうすればいいのか(略)わたしは(略)採れなかった」と言っているが、まさにそんな感じだ。

だが、萩原の歌には、読む者の心に届く強さがある。詠まずにはいられないという心のマグマが生んだ「生きるための短歌」。多くは現代社会の影を映しだす鏡であり、愛誦性にすぐれた歌が

多い。だからこそ、若者たちが共感し、惹かれるのだろう。〈ほくも非正規きみも非正規秋がきて牛丼屋にて牛丼食べる〉
〈今日も雑務で明日も雑務だらうけど朝になったら出かけてゆくよ〉
〈夜明けとはぼくにとっては残酷だ 朝になったら下っ端だから〉
頭を下げて頭を下げて牛丼を食べ頭を下げて暮れゆく

平成の幕が降りようとしている昨今、政府に言わせれば、日本の景気は回復したことになっている。だが、仮に全体的にそうだったとしても、一人一人がうまくいっているとは限らない。平成の最初のころと現在を比べると、正規雇用の労働者数はほぼ変わらないが、非正規雇用は倍以上の二千万人余に達する。三十四歳以下の非正規の若者は五百万人以上おり、多くはパート、アルバイト、派遣で日々を生きている。そうした若者たちにとって、萩原の歌は、まさに「俺たちの歌」「私たちの歌」なのだ。

中学受験で難関校の武蔵中学に合格した萩原が、かつて望んだコースを外れたきっかけは、苛酷ないじめだった。だが、生真面目で良心的な彼は人を責めず、仕返しを否定する。〈消しゴムが丸くなるごとく苦勞してきつと優しくなつてゆくのだ〉
〈ぼくたちは他者を完全否定する権利などなく ナイフで刺すな〉。後者は萩原無差別殺傷事件をモチーフにした歌だろうか。「やられたらやり返せ」とは対極の、優しさのダンディズムがある。

歌壇での評価にかかわらず、社会的には二〇一六年の代表歌集が鳥居『キリンの子』であったように、『滑走路』こそが一八年を代表する歌集となるのではないか。萩原は刊行を前に命を絶つたが、この自らの歌のように生き抜いてほしかった。〈生きていくというより生き抜いている ころころに雨の記憶を抱いて〉